

タイトル	「苔の衣」に見る賀茂季鷹の物語校正活動
著者	関本，真乃；SEKIMOTO, Masano
引用	北海学園大学人文論集(70)：242(1)-219(24)
発行日	2021-03-31

『苔の衣』に見る賀茂季鷹の物語校正活動

関本真乃

はじめに

『苔の衣』は鎌倉時代中期に成立したと考えられる全四巻の作り物語である。諸本はおよそ三十本現存し、その本文は前田家尊経閣本系統・穂久邇文庫本系統の二類に大別される。稿者はこれまで、穂久邇文庫本系統の諸本について異同状況を確認し、分類を試みてきた^①。その一環として、京都市歴史資料館蔵（賀茂季鷹旧蔵）『苔の衣』（外題「苔衣」、以下季鷹本と称す）について以前調査をおこない、翻刻を紹介した^②。しかし、その時点では金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』の書き入れを記すことが主となり、賀茂季鷹自身の書き入れについて内容に踏

み込んで検討することはできなかった。

賀茂季鷹は近世中後期（宝暦四年（一七五四）～天保十二年（一八四一））の著名な蔵書家であり、和歌・国学を能くした人物として知られる。季鷹は賀茂別雷神社の祠官の子で、京都に生まれ、有栖川宮職仁親王に歌道の手解きを受けた。その後明和九年（一七七二）から寛政三年（一七九一）までは江戸に住み、荷田御風の門人となつて、加藤千蔭や村田春海らと親交を結んだ。季鷹は江戸で『源氏物語』の講釈を複数回行ったことが判明しており、盛田帝子氏は「江戸での季鷹の文事に、『源氏物語』は濃い影を落としている」とする。

京都大学附属図書館蔵『譚仙堂書籍目録』は、賀茂経

樹が天保五年(一八三四)に改めた季鷹の蔵書目録である。それを見ると、蔵書が『源氏物語』の巻名によって箱に分類されていることから、源氏関係の蔵書が主に「⁽⁴⁾簞木」という二番目の箱に分類されることからも、季鷹の『源氏』への関心の高さは明らかである。

季鷹の物語関係の蔵書は、『源氏』関係を除けば「若紫」の箱に多い。「若紫」箱の蔵書を目録順に挙げると『落久保物語』『とりかへばや』『更級日記』『野守鏡』『土佐日記抄』『土佐日記考証』『竹取物語』『椿葉記』『百人一首古説』『和泉式部物語』『櫛の葉』『伊勢物語傍註』『あまのかる藻』『真字伊勢物語』『同 考異』『大和物語』『古今六帖』『無外題』『朝顔』『唐物語』『同 写本』『苔衣』と並んでいる。『苔衣』以降から物語を拾うと、『昔奈良帝』『出雲物語』『小夜の寝覚』『四季物語』『鳴戸中将』『堤中納言物語』『住吉物語』『宇津保物語』『松浦物語』等が挙げられる。その他は「葵」に『狭衣』が掲載されている。

季鷹は京都を代表する歌人として活躍した一方、京都に戻ってから校合した『とりかへばや』や『住吉物語』

(二)

『苔の衣』等への書き入れを見ると、引き続き作り物語への高い関心を有していたことが窺える。

本稿では改めて『苔の衣』に対する賀茂季鷹の書き入れに着目し、その特徴を探ると共に、季鷹の校正活動の実態に迫りたい。

一、季鷹の校正活動と『苔衣』伝来

一―一、季鷹の書き入れと書写校正活動

『苔の衣』季鷹本の詳細書誌については、既に紹介したので略し、端的に特徴を述べると、第一に上下巻と中巻では筆跡・装丁が異なることが挙げられる。加えて本文自体の祖本も異なり、上下巻は上下二冊本(巻一・四相当)を、中巻は巻三相当一冊本をそれぞれ祖本に持ち、取り合わせ本と考えられる点、全巻通じて季鷹自筆による大量の朱筆書入がある点の特徴である。

本稿では、まず季鷹の書写校正活動において、『苔の衣』を位置づけたい。そのためここでは下巻末識語に注目する。「此物語は江戸に侍りし比賣庫本又は内藤家の本と

ていとおほく世にちりほひたるうちにてかひ得たりしを此比きふねの御社に侍りて春の日のつれ／＼なるまゝに猪苗代法眼の本をかりてあはせ見つ、一わたり朱をくはへおく物ならし源氏狭衣やうのめうつしにはふた、び見まほしきこ、ちはし侍らすなん 寛政十二年三月廿日あまり四日」とあることから、季鷹は猪苗代法眼すなわち猪苗代謙宜の本を借りて校合を行っている。

季鷹は猪苗代謙宜と当時かなり親交が深く、『うつほ物語』を初めとして謙宜所蔵の本を多数用い、また共に校合し読んでいる。謙宜の名が見られるようになるのは、日付を明示する識語によると、寛政七年正月に『長能集』を「猪苗代氏本」を以て校合して以降のことであり、京都に戻った季鷹の旺盛な書写校正活動を見て取ることができる。

詳細は盛田帝子氏の「賀茂季鷹年譜考」を参照されたい。謙宜本による校合は『大江千里集・瓊玉和哥集』（寛政七年五月十九日）、『惟規集・千穎集』（寛政七年六月廿日）、『兼澄集』（寛政七年六月廿日）と続き、『橘為仲朝臣集』識語には寛政八年三月十四日に謙宜と校合したと

ある。

また『苔衣』を読んだ年の寛政十一年には、『歌仙歌集』識語に「以猪苗代謙宜法眼蔵本令一校。（中略）寛政十一年正月十四日 貴布祢社に勤番中乃事也」、『御裳濯河哥合／宮河うた合』識語に、「右一冊從猪苗代謙宜法眼令借用於貴布祢社詰番所書写畢 寛政十一年二月廿三日甲斐権守賀茂季鷹」とあり、貴船神社での勤番中に、謙宜本を以て本文の校合をおこなっていたことがわかる。

盛田帝子氏が、「京都に帰ってからは、貴船神社での宿直の際に、上賀茂神社所蔵の今井自閑本や猪苗代謙宜法眼本などを借りて書写・校合し、飽くなき購入と書写とで一大蔵書を作り上げた」⁸⁾、「江戸の遊学から京都に帰郷し、家を継いだ季鷹が、貴船社勤番中にその合間を縫って、親しかつた猪苗代謙宜の所蔵本によって、本文の校合にいそしんでいたことが知られる。夜勤の間に、上賀茂社三手文庫の今井自閑校本などによって、古典籍を校合し続けていたことは、季鷹旧蔵典籍の季鷹識語から知られるが、どの本にも共通しているのは、本文を意識的に契沖仮名遣に改め、本文を正しては自説を書き込む古

学者季鷹の方針である」と指摘する通りである。

季鷹は『歌仙歌集』校合後、寛政十一年七月廿七日に『苔衣』上巻を、八月十五日に中巻を校正している。その後「十二月十六日より廿九日昼時」まで今井自閑校本で『和字正濫抄』を校合し、案を加えている。そして、翌年(寛政十二年)三月二十四日、謙宜本によって『苔衣』下巻を校合する(詳細は後述する)。その後は識語に「猪苗代謙宜法眼と、もによみかうがへぬ」(五月十二日)とあることから、『頼輔集』を謙宜と読み校合している。さらに『師光集』識語に「寛政十二年五月十九日猪苗代法眼の柘野の山荘にて校合畢 賀茂季鷹」とあり、謙宜と頻繁に校合をおこなっていることがわかる。

『苔衣』の前後に読んでいるのは物語類ではないが、帰京後の書写校正活動の中で、季鷹は中世以降に成立した物語・説話類を定期的に校正している。『四十二の物あらそひ』は寛政二年三月九日に「一覽之序加愚意且正仮名畢」とあり、寛政七年八月十五日に古写本によって再校を終える。『小夜衣』(外題『出雲物語』)は寛政四年月十三日に「一覽」し、『唐物語』は寛政五年七月に改めて

校合している。

季鷹は安永年間に『伊勢物語傍注』を刊行するほか、『大和物語』を安永七年八月五日、『竹取物語』を安永二年九月に山岡明阿校本で校合し、『おちくほ物語』は安永八年九月に「一校」を終えている。天明年間には、『源氏歌』のほか、『更級日記』、『中務内侍日記』など、中古中の日記を多く読んでいる。¹⁰⁾ これらを併せて考えると、寛政年間、中世の物語に対する季鷹の興味が深まっていった時期に相当すると考えられよう。『とりかへばや』を既に書写させていた¹¹⁾季鷹は、『苔の衣』をどう讀んだであろうか。

ついで、季鷹本『苔の衣』の伝来について検討する。下巻末識語に旧蔵者が記されていることに注目したい。

一―二、季鷹本『苔の衣』の伝来と書き入れ

『苔の衣』諸本のうち伝来が明らかなのは少なく、この識語は貴重である。「此物語は江戸に侍りし比叢^{マツ}庫本又は内藤家の本とていとおほく世にちりほひたるうちにてかひ得たりしを」とあり、この『苔の衣』は季鷹が江

戸で買得たもので、「牘庫」すなわち磐城平藩の藩主内藤義概（風虎）（元和五年（一六一九）～貞享二年（一六八五））の旧蔵本であるとする。季鷹が江戸に住んだ期間は、明和九年（一七七二）から寛政三年（一七九一）までであるので、季鷹が当該本を手に入れたのは、この期間であろう。

他に賀茂季鷹旧蔵本のうち、『句題百首』『影供歌合』『吉野拾遺』『隆源口伝』『四十五番草木歌合』『私言物語』などには牘庫印があり、賀茂季鷹が牘庫本を購入したと
いうのは事実である。

ただし季鷹本『苔の衣』に牘庫印は見当たらない。同じように、識語を持つが牘庫印のない賀茂季鷹旧蔵本は、管見の及んだ範囲では『将門記』『唐物語』『万松院殿穴太記』である。盛田帝子氏は『苔衣』のうち、「この中巻は牘庫本ではなく、後世の写本かと思われる」とする。実際内藤家の蔵書目録と推定される東京大学史料編纂所蔵『書物目録』（四一〇五―八）には「苔衣二冊」とある。内藤風虎が蔵した時点では『苔の衣』は二冊であり、その後取り合わせられたと考える。季鷹がこれらを取り

合わせたのであれば、『苔の衣』への興味関心の高さが見て取れ、季鷹が中巻を取り合わせたのでなければ、季鷹の手に渡る前に、上下巻と巻三相当零本が取り合わせられた『苔の衣』が存在していたことになる。いずれにしても本文の生成と諸本分類を考える上で示唆的である。以下、『苔の衣』本文に対する季鷹の書き入れの特徴を
探っていく。

二、季鷹本書き入れ

二―一、季鷹本の書き入れの段階

季鷹による書き入れの種類は、いったん便宜的に分類すると、①頭注②ひらがなの修正傍書（仮名遣い・表記）③本文修正案傍書④濁点付与⑤句点付与⑥区切⑦漢字傍書⑧「イ」本校合⑨「花」本校合⑩識語の十種類である。

季鷹の安永年間から享和年間にかけての書き入れを見る限り、仮名遣いの修正・濁点・頭注・校合は基本的に見られるものであり、書き入れの色や、種類の多少の違いこそあれ、『苔の衣』の書き入れはごく標準的なもので

ある。

『吾の衣』に対する季鷹の書き入れは、少なくとも三度にわたっておこなわれたと想定できる。

たとえば中巻三七才頭注に「季鷹案うちは衍字かまた経うちよみなとの脱字歟」とある。これは、本文「もしやとおほしつ、御かちなといよくまいりたまふにの、しりうちつ、ものも聞えぬまでなれ」という箇所の傍の傍線部分に関しての注である。「イ」本注記では「う」を「み」に改めていることから、「イ」本注記は頭注が記された時点よりも後で記されたものということになる。

同じく上巻六七才「立かへりこととし歟なければ」の部分、一度朱で見せ消ちして「し歟」という季鷹案を示し、その左横に朱で「ことくイ」とある。書き入れは本文の右横に傍書するのが標準的なので、季鷹案を書き入れた後、「イ」本で校合したことがわかる。

「イ」本の後にさらに「花」本で校合したことは、以下のような例が複数見られることから明らかである。

上巻六四才「きんはすこしをりやりて」の部分に対して頭注で「季鷹案折打似たるより心なきもの、書あやま

(六)

ち成へし」とある。実際には「をおしイり花同すなわち、「をり」を見せ消ちして「おしイ 花同」としているが、「をり」と「おし」の間には消された痕があり、ここには頭注の季鷹案「うち」が書き込まれていたのではないかと考えられる。つまり、「季鷹案」がまず書き込まれ、その後「イ」本で校合、さらにその後で「花」本で校合したと考えられる。

「花」本注記が「イ」本注記と同じ箇所に付され、かつ異なる例は、他に確例三のみである。一例目は、中巻三二才「むかひよせてよりイかしつかんは」の部分、「よ」に「と花」とさらに右に傍書する。つまり「花」の本文は「むかへとりて」であることがわかる。二例目は下巻六二ウ「いとほいぞくおほされつ、あへるも」の部分、いったん「へ」というイ本注記をしながら、「く花」という「花」本注記を本文左に傍書する。⁽¹⁶⁾

他に、「イ」本注記の後に「花同」とする例が、先述の六四才と、一九才「ありそ海の浜の真砂はかひそなき君もいそイか齡の数をまけつイを同されて」含めて上巻に三例見られる。これらからも、「イ」本注記の後に「花」注記が書き入れられ

たことが裏付けられる。

「イ」本と「花」本の関係については後述することとして、その他の書き入れの時期は、以下の識語から見当をつけられる。上巻末の寛政十一年七月廿七日識語に「句をきりかなをたゝしいさゝかかうかへをしるしつけ侍る也」とあり、中巻末の寛政十一年八月十五日識語で「此ふみとう出てみるにかきそんじぬる所々かなの誤なともすくなからねはよき本見出んまでにとて一わたり見るまゝに句をきり濁をさし聊かうかへをもしるし付侍りぬ」と述べる。そして、「又のとし春猪苗代法眼の本をかりて一わたりよみあはせ侍れと」（上巻末識語）とある。すなわち季鷹は、一通り読むついでに、濁点を記し、句を切り、仮名の誤りを正し、私案を述べ、その翌年に異本と校合している。したがって、最初の書き入れには、基本的に「イ」本注記・「花」本注記を除くものが含まれると考えられる。

二―二、季鷹本『苔の衣』の「仮名遣い」

季鷹の仮名遣いへのこだわりは強く、『苔の衣』全巻を

通じて逐一訂正を傍書している。季鷹は、安永五年（一七七六）刊の『伊勢物語傍注』の凡例でも仮名遣いについて、「いにしへの仮名づかひにてかき侍りぬ」と述べており、仮名遣いへのこだわりは以前から継続して見られるものである。盛田帝子氏が「天明八年（一七八八）に契沖仮名遣いによって刊行された『正誤仮名遣』や、また季鷹が収集した古典籍の本文のことごとくが定家仮名遣から契沖仮名遣に直されていることを見ると、き明らかである」と述べる通りである。ただし契沖仮名遣いへの訂正のみを最初に書き入れたわけではなく、季鷹が一連の校正作業として「かなをたゝしいさゝかかうかへをしるしつけ」たのである点は注意すべきである。

季鷹の「仮名遣い」に関しては、今野真二氏が『正誤仮名遣』について「清音濁音ということが「仮名遣い」に含められているようにみえる。これは現代考えられている「仮名遣い」という枠組みとは一致しない¹⁸⁾と指摘することを押さえる必要がある。実際、季鷹の書き入れを見ると、漢字の下の大返し「く」については、「人く」を「人々」とし、「色く」とするなど、漢字一字の直後

の「く」を「々」に訂正する傾向がある。また「かた」が「く」のように、読みで濁点が付くものについては「く」を用いていない。季鷹が「く」を直前の語が平仮名かつ繰り返し部分が清音であるときに用いる記号として捉えていることがわかる。

こういった表記の訂正は、季鷹にとっては仮名遣いの一環であったと考えられよう。加えて「ほんい」(『正誤仮名遣』では「ほいなし無本意」)「たいめん」、「侍卜らす」(「侍卜れは」のように、撥音便の「ん」を消す、「はんへり」の「へ」を消すのも同様であろうか。

そのほか、「そつちの宮」「ささきの宮」のように語を改めるほか、「春宮」などの漢字訂正、「き」と読める字形に「き」と傍書する表記の訂正も見られる。

『正誤仮名遣』の凡例には、「もはら古事記日本紀萬葉集和名抄等の古書にもとづきて後世一家の私論を拠とせず」「うまなるを後に転じて和名抄にもむまとあれど古にしたがひてうまと出せり此類猶あるべし」「仮名に古と後世とたがへる中に一向にあやまれると転ぜるとの二あり」などあり、表記および語の正確な元のかたちに

(八)

ついて季鷹が多大な関心を抱いていたことが見て取れる。『吾の衣』もおおよそこのような方針に基づいて、表記を「古」の表記に改めているのだと考えられる。つまり、現代一般的に「仮名遣い」に含まれないこういった訂正も季鷹にとっては「仮名遣い」の一環であったろう。

また中巻一六ウ「かやうのことをき、給へましかはいかにほあなくお〇さまし」の補入書き入れはイ本注記等ではなく、「おほす」という語の未然形が入るはずだといふ季鷹自身の判断を書き入れたものだと考えられる。下巻「給ふたれは」のように活用形を訂正する例も数多い。今野真二氏は「そもそも「仮名遣い」という事象は「活用語の活用」と結びつくことがあった。つまり「仮名遣い」という事象のみをテキストから取り出してそのことのみを論じてきたのは現代人だったともいえよう」と述べる。このような活用形の訂正も、『正誤仮名遣』が時に活用語も示すことからすると、仮名遣いに関係ある事象として、「かななをたゝし」の範囲に含められよう。

では「やう」は「さま」に、「きそく」は「けしき」に、「いまた」は「また」に全巻通じて改める、「これほど」

を「かばかり」に、「此かた」を「こなた」に改める（一六ウ）等はどうであろうか。

これらは本文の文脈とは離れたところで、単語レベルで機械的に改められているものである。ほかに中巻一九オ「心ほそかりぬへし」なども、一見して不自然であると判断がつくであろう。単語を単語として捉える行為が「仮名遣い」と直結しているのであれば、これらも、「正しい語のかたち」を求める「仮名遣い」と強く結びついた行為であったと言えるかもしれない。

一方でこのような改変は、「きそく」と「けしき」の意味の違いを無視した恣意的な改変とも言える。そこには「きそく」は誤りで「けしき」が正しいという季鷹の「解釈」が入り込んでいる。ただし、そもそも契沖仮名遣いに改めるといっても、たとえば「お」を「を」に改める場合には文脈理解という解釈が否応なしに入り込む。

『大和物語』一オの識語中に「つれ／＼なるま、に此物語とうて、みるにいとあやまりたるかな、との多かれはそれをた、し又人、の官位などは季吟のしるしたりしをうつしおろ／＼かうがへたるはかたはしにしるしあるは

かしらにあげなですれと猶あやまちをた、さん人の侍らはこよなきさちならんかし」とある。これからすると、「かんがへ」は傍書・頭注を指すと考えられるが、仮名遣いの修正も傍書であるため、傍書のどこまでが「かんがへ」であるかは、やや不明瞭である。「新古今作者」「寛平九年七月讓位」「新帝にもかざるまじければは猶後々もつかへまつれと也」などは明らかに「かんがへ」であろうが、「伊勢の寸御寸」はどうであろうか。

漢字傍書には、解釈が自ずと入り込む。以下『苔の衣』の漢字傍書を列挙する。上巻「二さらさき月、如女の具くし身」
元くゑんふく服「いなみたる」、事こと、「おかしき龍こ」
出こそ「しし給ひてしゆつけ」、宿すぶくせ世「こ夜今」
内に二三「こうちのおと、」他ことく、「おほしなけきたる故けにや」
吹おはする故けにや「ふきもの母ひきものは、
凡宮「た、人。中巻「祖おち、父御そ、夜よめ目みや宮や故こ
うへ、疎をろか」
後おくらかし」
小おくら倉うすくみ色薄うすくみ色
見しるし世よに増みましきこえ破やらせ群れうし紙み
代にかふ等とうしん身しな手御てならし法ほくゑの
供くやうほう法して阿あしせん出しゆつり離のはうほう方はうほう法

「れ^被うら^羅きん^節し^身う」みしろ^動きも「あし^脱すり[?]」。下卷「かみ^疑」
 「宰相の三^位み^位」「いむ^戒こと」「やりのこ^破し」「み^身、となりぬ
 らん」「三^位お^位など」「おもひのけ^放にや」。一般の読者にとつ
 てはやや意味が取りにくいであろう語および仏教関係の
 語に多く見られる。「うつく^羅しさ^愛」(上卷一ウ)は注釈
 とも取れるだろう。

かなを漢字に改めるということは、本文を解釈する行
 為であり、傍書からは季鷹自身の解釈がはっきり見て取
 れる。季鷹の著した『正誤仮名遣』の形式は「平仮名(清
 濁区別有)+漢字書」というものである。ここでは、漢字
 書は語をどう解釈したかの結果でもあり、かつ仮名遣い
 と切っても切り離せないものである。解釈と仮名遣いは
 明確に分離されるものではない。ふりがなも同様であ
 る。⁽²⁰⁾

やはり、「かなをたゝす行為と「かうかへをしるし
 つけ」る行為の間には、季鷹自身明確な線引きはなく、
 複合的な一連のものとして捉えるのがよいだろう。そし
 てそれゆえに季鷹の校正作業には「解釈」が自然と入り
 込んできて切り離しにくいことも指摘できる。

二一三、解釈と本文修正・頭注

一度目の「かうかへ」の中に明らかに含まれると考え
 られるものとしては、一部を除いた頭注が含まれる。頭
 注は、上卷「中ついで」「変生男子歎又便生端正有相之女」
 「岩垣」、中卷「糺の神」「等覚龍」「たらちを」「以此常耳」
 「けふもくれぬ」「聖霊」「袖だにさゆる」「十羅刹女」「如
 説」「棚機」「若有女人」「善知識」「あひ思はぬ」「法華行
 法」「あしせん」「苔衣」、下卷「都嶋」「誦経」「人のおや
 の心はやみにあらねとも子を思ふみちにまどひぬる哉」
 など、引歌を示したり、重要語・仏教語を示したりといっ
 たものが多い。

そのほか、上卷「こたひ こだいにて古代也」、下卷「季
 鷹案まみは俗にいふめつき也」などは語の注釈である。
 「季鷹案」のうち上卷六四ウ、中卷三七才頭注は前述した。
 上卷二一才「くれつかたそからうしてことなりぬまつな
 に、かとおほさるゝにひめ宮にていとらうたけにおはす
 るを」の頭注に「先何にか季鷹案いと拙」とある。確か
 に『源氏物語』にはこういった表現は見られないが、『栄
 花物語』巻二十六で嬉子が親仁親王が出産した場面には

類似の表現が見られる。

あなうれし、いみじと思して、また後の御事を、いかにと思せど、まづ、なにぞと内にも外にもゆかしう思すほどに、男御子にぞおはしましたしける。そのほど、殿の御気色よりはじめ、そこらの内の人思ひたる有様、ただわが身一つの喜びに思ひたる。

『増鏡』にも同じ表現が見られる。

かつは、御身の宿世見ゆべき際ぞかしと思せば、いみじう念じ給に、すでに事なりぬ。まづ何にかはと心騒ぐに、御兄の大納言公相、「皇子誕生ぞや」と、いと高らかにのたまふを、（『増鏡』内野の雪）

「いと拙」とまで断言できる表現であるか、疑問である。実際この部分には諸本異同がない。

中卷三六才の頭注に「季鷹案出家の事申給へる詞脱せしにや」とある。これは、「いはんかたなく心ほそき

○はいもとげなほやとの給ふをりしもイ ひめきみの御ふところに」という

本文に対する注であり、季鷹の考えが正しかったことは「イ」本注記によって裏付けられる。

中卷七八才「めてたく○礼のさほうにとりまかなひて」の頭注に「例のさほうの上脱文にや」とある。「見奉る」は頭注より後の補入であることがわかる。（注）

中卷七九才「かきつけのま、にとりて○参らする花殿うへは御ふみとき、たまひて」の頭注に「季鷹案とりての下奉る云々の詞落たる成へし」とある。「花」本は「とりて」の下に「参らする」があるので、季鷹にとっては自身の推測が正しかったことが証明された格好になる。

しかし、これらとは異なり、異本校合以後と考えられる頭注もある。中卷七三才「つねにもおはせぬかおほむ出ていのかたに忍ひていりたまひてふみかきたまふ」の頭注に、「かほむてい一本おほむていと有案御出ぬの方なるべし次下並見るべし」とある。この頭注は「イ」本注記をした際のものと考えられる。（注）

頭注以外で明らか「かうがへ」に分類できる例は、上卷六一才「た、今はいとめやすき御あそひなり」に対

して、「あそひ」の後「がたきなどの詞脱せしにや」とある傍注である。なお実際は「花」本により「御あま^{は花}ひなり」と校合され、解釈上この問題は解決している。

このほかにも、本文を季鷹が修正している例は数多くみられる。本文修正には大別して二種類ある。たとえば「衍」のように断定するものと、「衍歟」と疑問を呈するものである。

「歟」がつく例を示す。上巻九ウ「御かほもふくらかにけち^{な歟}かきものからあなつらはしからす」の当該部分には「イ・花」本とも注記なく、現存する諸本いずれも「けちかき」である。「ものから」を逆接と取れば自然であるが、季鷹は近世一般的であった順接と捉えたため、「あなづらはしからす」に順接するのにふさわしい語に改めたのであろう。

そのほか、上巻一〇オ「かくてことゝもはてぬれはやう^{さまく}御あそひはしまりぬ、一七オ「御心さしあるかたにはいまも^{行カ}く^カ出き給ふ」のように、当該部分に校異がないものも多いことから、「く歟」とあるものに関して、季鷹が断定できない修正案だと考えられる。

(一一)

断定する本文修正については、さらに二つの可能性がある。一つは季鷹の自信のある解釈である。

中巻一三ウ「たけきことゝは御^わほ^かし^なとをそよにすくれて」の部分、穂久邇文庫本系統諸本は「ほうじ」、前田家本系統諸本も「法事」「ほうじ」であり、「わざ」とする本文は見当たらない。「ほうじ」を見せ消ちにして「わざ」とするのは、「わざ」の方がふさわしいとする季鷹の解釈である。なお、「ほうじ」自体は『源氏物語』本文にもある語であり、積極的に改める必要があるとまでは思われないにもかかわらず改変していることになる。このように本文よりも、自らの判断を優先して本文を改める場合が季鷹の校正には散見する。

もうひとつ、何らかの異本に拠るかと考えられるものも多い。例を示す。中巻一一オ「右のおとゝきたまへはおりふしをいとおほしさはく」の部分、「き」を「わづらひ」、「おりふしを」を「きんだち」と改めるのは、季鷹が已で生み出した解釈と考えるよりも何か参考とされた本文があったと考える方が自然である。その場合、「イ」本もしくは別の本の存在が考えられる。

下巻二八才「思ひすて はなれイ まつらぬ心よはさも心うくて」

の部分、「はなれイ」と「たて」は同じ濃さの朱であるが、「我ながらうらめしくなん」は朱がより橙に近い色であり、書き入れの時期が異なる可能性がある。ちなみに同丁の「花」注記はより黒い朱であり、それとも異なる。とすると、「イ」本注記の入れ忘れ、「イ」本を見返した際の書き入れ、もしくは別の本を校合に用いた際の書き入れの可能性がある。

このように、校合箇所について判断がつきづらいのは、「イ」本の本文の全容が季鷹の恣意的な校合方針もあって判然としないからである。

三、校合

三―一、「イ」本

前述した通り、一度目の書き入れは、上巻末識語の日付「寛政十一年七月廿七日」、中巻末識語から同年八月十五日とあるころにおこなわれた。その後「又のとし春猪苗代法眼の本をかりて一わたりよみあはせ侍れと」（上

巻末識語）、「春の日のつれくゝなるまゝに猪苗代法眼の本をかりてあはせ見つ、一わたり朱をくはへおく物ならし（中略）寛政十二年三月廿日あまり四日」（下巻末識語）とある通り、寛政十二年に猪苗代法眼すなわち猪苗代謙宜の本を借りて校合したとある。したがって、この時点での異本（「イ」本）は猪苗代謙宜所蔵本であろうと推測できる。

『苔の衣』の本文について、季鷹は謙宜本を借りる以前の識語に「よき本をえて又々たゝし侍るへき也」、「此ふみとう出でみるにかきそんじぬる所々かなの誤なともすくなからねはよき本見出んまでにとて」と記し、「よき本」の出現に期待している。この期待のもと校合されたのが「イ」本であり「花」本であろう。

ちなみに「イ」本・「花」本とも前田家本系統であることが異本注記から読み取れるが、現存する前田家本系統諸本のうち、イ本注記と本文を混成させてできあがる本文と、完全に一致する本文を持つものは見当たらない。

たとえば、下巻一オ「ゆくゑなへなき人の御事こひしくかなしいなんといひ出聞こえたまふ」というところの傍線部

は、前田家本系統諸本では「かなしくなむおほし出きこえたまふ」とある。前田家本系統諸本を見たのであれば校異として存在するはずの傍線部について季鷹は校異を採っていない。

中巻五九ウ「姫きみ見たまひては、のつくるひてあなかしこか^ならす^ゆ〇ときくはほとけにたてまつれと」の傍線部、季鷹は「かならず」と解し、「花」本は「枯らすな」とある。現存する前田家本系統諸本はすべて「からすな」であるにもかかわらず、「イ」本注記はなく、季鷹は、「イ」本の校異を採らなかつた可能性が高い。

下巻九ウ「た、こうへの御かほをうつしお とり花たらんやうにおはすれは」の部分、季鷹は「をき」の「を」を「お」に改め、花本によって「とり花」としている。前田家本系統諸本で「をきたらん」という本文を持つものは確認できておらずすべて「とりたらん」であり、季鷹の見落としてしか、もしくは季鷹の判断によってイ本校合時には注記が書き入れられなかつたと考えられる。

同様の例として、下巻一ウ「まゆ^{みか}ひたひつき」、「ゆ」の右に「みか」とありさらに「み花」と左に注記されて

(一四)

いる。「イ」本注記はないが、現存の前田家本系統諸本はいずれも「まみ」とある。この場合、穂久邇文庫本系統諸本も、「まみ」となっているのに加え、姫君の美貌を表すときには「まみひたいつき」とするのは半ば定型表現であるので、イ本が「まゆ」だったのかはやや疑わしい。

下巻一五オ「もてなし聞え給ふにしたか^性ひてはあやにくなる」の傍線部、「花ナシ」とあるが、前田家本系統諸本も穂久邇文庫本系統諸本も「花」本と一致し、「イ」本も「花」本と同じ本文であつた可能性が高い。

つまり季鷹は、すべての異同を書き入れるのではなく、考察した結果注目するに値すると判断したものを選択して書き入れていることが明らかである。

田中康二氏²⁴⁾が指摘する、伊勢貞丈の『安斎随筆』に次のようにある。

書を校合する事を知りたる人の校合するには、彼の書の善きを此方の本に書入し悪き事をば消すなり。

事を知らざる人の校合するは、彼の本とよみくらべて相違の文あれば、善悪の考もなく違ひたるほどの

事をば妄りに此方の本へ書き入るゝ故、其の本汚れて却りて悪本となり、義の通じがたきやうになるなり。

まさに季鷹は己の判断によつて、「彼の本の善きを此方の本に書入し」ていると考えられる。その結果、前田家本諸本本文の校異が書き入れられていない場合、季鷹の見落としか、それとも季鷹の解釈上の判断によるものなのかかわからず、特に「イ」本を再現できなくなっている。

上巻末識語の続きには、「又のとし春猪苗代法眼の本をかりて一わたりよみあはせ侍れとかれもまたくそなはれるともみえずなん」とある。つまりおそらく「イ」本については不完全な本文であるとの認識が季鷹にあったと推測されるが、それを再確認することは現時点でできない。

では、「花」本はどうであろうか。

三二、「花」本

「花」本についてはその正体が明らかである。

中巻七六オ「た、ひとりほくゑのくやうほうして」の本文には、それぞれの傍線部に「法華」「供養法」と傍書がある。これは最初の季鷹の解釈であろう。さらに「くやう」の「く」を見せ消ちして「ぎ花」とある。つまり花本に基づく季鷹の解釈としては「ぎやうほう（行法）」となる。貼り付けられた付箋にも朱筆で「法華行法」とある。この部分、穂久邇文庫本系統ではすべて「くやうほうして」とある。前田家本・書陵部本・底本・内閣文庫本「くやうほうして」、黒川五冊本「くやうおほして」とあり、京都大学吉田南総合図書館蔵本（以降、京大吉田南本と称す）のみ「きやうほうして」となっている。

この点に着目して「花」本注記を、京大吉田南本の本文と照合したところ、「花」本注記はほとんどすべて京大吉田南本に一致することが明らかになった。一致しない箇所は、わずか数箇所である。「花」本注記が全体およそ三五〇箇所あることからすると、「花」本は京大吉田南本と同一本と見なしてよいであろう。

京大吉田南本の簡単な書誌を以下に示す。

縦二四・三×一七・二cm、三冊本。巻名がそれぞれ「草」

(九四丁)「木」(五九丁)「国」(七三丁)となっている点が珍しい。草巻は、いわゆる巻一・二に相当する。本文一〇行書で、全巻一筆。表紙は薄茶地に茶色の斜縞、中央上部の題簽(一六・〇×三・五cm)に「苔衣草(こ希古ろも 木/古計故路も 国)」と墨書する。印記は「第三高等學校圖書印」・「林森太郎先生記念會」□「林森太郎先生遺書」である。

京大吉田南本の伝来、及び季鷹が「花」本と表記した理由は現時点では不明であるが、季鷹と、「花」と略称される人物の間に何かしらの貸借関係があったのだろう。なお、「花」本注記から京大吉田南本の本文を復元することも不可能である。たとえば、下巻一二才「御けしきを姫君はた、ひとみちに」は、京大吉田南本の本文では「御けしきをた、ひたふるに」となっているが、「姫君は」の部分に関しては特段注記はない。このような例は枚挙に暇が無い。

やはり、季鷹が考察した結果、季鷹が注目するに値す

ると判断した異同が書き入れられていることが裏付けられる。

書き入れ全体からみると、二―一でも述べた通り、「花」本(京大吉田南本)は「イ」本注記について訂正を加えることは少ない。これはそもそも京大吉田南本と「イ」本注記がほぼ一致し、大きな異同がないためである。具体的に、下巻二一ウ「むかしにたちか^{おほえたる}はりたるこ、地^{御里すみ}して、「花」には「むかしおほえたる御さとすみ」とあり「にて」がない、下巻二ウ「たれもよ^{にイ}ふけに○は^{と花}のたまはしと」、「花本には「よに」がないといった程度の異同に留まる。ただし、注記として採られていない部分の「イ」本本文が不明なので、注記部分^がだいたい一致するとしても、「イ」本と「花」本の本文自体が近似するとは限らない。次いで、京大吉田南本と、「イ」本注記のない本文修正(「歟」があるものを除く)を比較したところ、これもほぼ近似し、大きく異なる箇所はなかった。「イ」本と「花本」の注記の方針の違いとして、「花」に関して、前述したように、「花同」「イ 花同」のほか、「花ナシ」という注記がある点が指摘できる。

中巻一八ウに「うちまいり〇^{の歟 花アリ}」こともつみにとまりにし」とあり、自身の案を示し、その下に「花アリ」と注記し、自分の案が正しかったことを取返して記している。

中巻八三オ「かやうの事をき、たまふに母うへのおりはさすか」の部分、「母」に朱で「も」と傍書し、さらにその後で「は、花」と校異を示している。「母」を「も」と読む解釈が正しいと季鷹が断じていたならば、「花」本注記はされなかったであろう。

下巻一〇四オ「御らんしつけたるを女院の御こ、ち」、「を」は最初「衍歟」とあり、その後「花ナシ」とされ、「歟」を見せ消ちして「也」としている。「花」によって自身の考えを裏付けていることが窺える。下巻五〇オ「さすらへむと本^{思ひ花}侍^るへゆ^同なんと」も同様である。

季鷹自身がいずれの本をよりよい本文と位置づけていたのかは断言しがたい。しかし、最初は不要だと判断して切り捨てたものが、後から実は大事だったと判明するのはままあることであり、複数の本を校合することによって解釈はより深められ、異同を見るべき箇所も明らかになっていく。そういうことから、校合時により注

意深く参考にされたのは「花」本、すなわち京大吉田南本と言えるだろう。

気になるのは、下巻五〇ウと五一オの間の挟紙である。季鷹の弟子の河本公輔²⁵が上巻一七ウ・一八オの間の挟紙に「さい院にまち給ふ事云々公輔案一本齋院とあれと西院の誤也」、同じく一八ウ・一九オの間の挟紙に「齋院は西院也とうゐんと有もひんかしの院也」と書いているのは、筆跡も挟紙の色も明らかに異なる。挟紙には「異文の本文水戸納言彼文庫本よりはよきか」とある。「水戸納言彼文庫本」は、『国書総目録』にある旧彰考館蔵本（五冊）のことであろうと考えられる。「水戸納言」が誰かは直接断定できない²⁶。

挟紙は「か（加）」を用いるが、季鷹は「か」に「加」を用いない傾向にある。挟紙は「き（幾）」の形が特徴的であるが、これも寛政・享保ごろの季鷹筆とは異なるように思われる。

挟紙の指摘がいつのものかは知れないが、「異文」が旧彰考館蔵本（五冊）よりもよいと考えている人物がいたことがわかる。「異文」が「イ本」「花本」のいずれを指

すのか、それとも両方を指すのかは不明である。ただし、五冊本は四冊本から分かれたもので、黒川文庫本（五冊本）が四冊本の「下位にあるものと思われる」ことからすると、この指摘は概ね的を射たものであると言えよう。

四、季鷹の態度と評価

いずれにせよ、『苔の衣』については、季鷹周辺において、季鷹が三回以上も読み校正し、その弟子の河本公輔が挟紙に指摘を残す程度には熱心に読まれたことが判明している。

成立年代の近い『とりかへばや』『小夜衣』の書き入れと比べると、『小夜衣』（外題「出雲物語」）の季鷹の書き入れは、仮名遣いを直し句点を打ち、濁点を打っているものの、漢字傍書などは九丁までで無くなり、識語も「寛政四年子七月十三日於社頭一覽畢賀茂季鷹」と記すのみである。

一方『唐物語』（文化三年春刊）の広告の最後に「賀茂季鷹県主校正 とりかへばや物語 全部四冊追彫」とあ

るように、出版予定もあった『とりかへばや』は、かなり力を入れて読んで校正していたと考えられる。しかし、『とりかへばや』の季鷹書き入れを見ると、濁点を入れるのは上巻一〇三丁で終わり、朱書き入れは目立たない。

これは、識語に「此取かへばや物語は江戸に侍しをり」山岡明阿の本をかりて人してうつし侍りし也させふるきはうせて是はいまとりかへばやなりと云説有いとまなさに句読をたにきらす只一わたり見しのみいとま見出てこそ賀茂季鷹判」とある通り、墨筆傍注や頭注までもが、ほぼ山岡明阿本、いわゆる浚明本の正確な写しであることも関係するだろう。

季鷹の師である御風と浚明は親しく、山岡浚明（註）とは、『扇合』でも同席し、親交があった。浚明本『とりかへばや』を借り得たのはその縁によるものであろう。浚明本「系統『とりかへばや』には写本が多いが、その序からは、次の傍線部のように、浚明の『とりかへばや』への高い評価が読み取れる。

とりてみればいとすゑのよの人のてにいてきにたれ
 ともすへておかしくあはれなるものなればよむかま
 たくあやまれるをなほしかなのたかへるをもまた
 かたはらかうかへたることをしるしつけて見るに た
 よりあらんことをとてなん やよひのつこもり
 のよししるしつけぬ 宿禰深明

頭注にも、本文の表現に対する批判等はない。また、
 文意を取るための解説・傍注が多く、異本注記は最低限
 であり、仮名遣いの訂正も少ない。明阿の校正方針と、
 『苔の衣』に見られるような季鷹の校正方針との間には、
 かなりの隔りがある。

『とりかへばや』や『小夜衣』と比較すると、『苔衣』
 には、季鷹が自ら「かゝる心中までも白きあかきすゝり
 身をはなたぬは季鷹かくせにこそ」（中巻末識語）と表現
 するところの校勘癖が存分に發揮されており、季鷹自
 身が三度以上も細かく読み返し、これだけ熱心に識語も
 書き、細かな字で大量に書き入れを残しているのである
 から、『苔の衣』に一定以上の関心があったことが窺える。

その関心のありかたは、書陵部二冊本『苔の衣』の序
 に記される、小山田与清の興味とは明確に異なる小山田
 与清は「萩原宗固随筆云苔衣といふ物語の本あり狭衣を
 □したる物のやう也作者しらす紅葉の大臣の御息女親王
 のかたへ嫁し給し後に二子をうみ給ふことを書たりもの
 語に戀生フタゴのことを書たる始也為家卿の比のものとみゆ風
 葉集のうたをおほくいれられたり云々与清曰風葉集の哥
 を此物語にいれたるにはあらずこの物語のうたを風葉に
 とれる也風葉は文永中の作にて夫よりも以前の物かたり
 なり源氏物語を引たる所あり」と指摘する。萩原宗固は
 天明四年没の歌人であり、小山田与清は、季鷹が親交深
 かった村田春海の弟子である。『風葉和歌集』も季鷹の
 蔵書目録に見え、季鷹は『苔の衣』の成立時期について
 もこれらの言説に触れ、ある程度見当をつけ得た可能性
 もある。しかし季鷹は『苔の衣』の成立時期やあらずじ
 についてはまったく記していない。それを明らかにしよ
 うとすることは、季鷹の関心のあり方とは重ならなかつ
 たと考えられる。

季鷹の校正活動における関心は、『伊勢物語傍注』や、

『竹取物語』の書き入れにも共通するように、文脈の解説を傍注として長々と書き込むことよりも、主として仮名遣いと異本校合の書き入れ、それによって物語を理解し校正することにあり、自身の注釈は最低限の書き入れで示している。

物語の内容については、季鷹は「されと此物語ならばかばかりにて一わたり見ばたりぬへく社」「源氏狭衣やうのめうつしにはふた、び見まほしきこ、ちはし侍らすなん」と辛辣な評価を下している。

確かに『源氏』を読み馴れた目からすると、『苔の衣』への評価は妥当であろうが、その評価は、校正態度そのものに直結する。

浅田徹氏が「契沖や春満、真淵らは古くから伝承されてきた本文に対して畏敬の念などを持たず、誤写説を立てるのに躊躇しない」、「宣長はテキストに一定量の誤写があるのは当然だという態度を常に取っていた」と指摘するような態度が、近世には芽生えていた。

一方でそれは、注意をせねば、供蒿蹊『閑田次筆』巻三に「自己の考へをもて文字を改められしこと多し。是

より開けて、加茂氏を始め、心のままに字を取り替へ語を改む。これは所謂「活眼にて活書を見る」とも言ふべけれど、又万葉集も吾が撰のやうになり、古伝の本は亡びなんやと危ふし」と危惧する通りのことを誘発しかねない。

たしかに『源氏物語』などについては、誤写を正せば「正しい本文、真実の古典のすばらしい姿」が存在すると信じられただろう。しかし、『苔の衣』のように、「本文の元の姿を復元しても、それ自体価値の低いものだ」と考えるのでは、自ずと校正態度も変わってくるに違いない。事実、『苔の衣』の本文改変は、どちらかというところ、「心のままに字を取り替へ語を改む」のレベルである。

季鷹は、すべての校異を書き込むことはせず、季鷹の判断に基づいて取捨選択が行われ、かつ季鷹の解釈によって、異同にない本文への恣意的な改変も行われている。『源氏物語玉の小櫛』巻四において、「かならず其文字の誤と、しるく見えたることなども、こゝらあれど、本に見えぬは、みなさてある也」という校異方針を打ち出している本居宣長との違いはここにある。

つまり季鷹による校異を拾うだけでは、校合した本の本文を再現することはできず、いたずらに混じり合った新しい本文が生成されてしまう。少なくとも『苔の衣』に対する季鷹の意欲的な校正活動は、労力の割に、その再現性が著しく低いのが惜まれる。

ただし、季鷹の解釈・判断の方針と実際を知ることによって、季鷹の『苔の衣』校合時の興味関心は、「古典成立時の本文の正しい姿」よりも、「いにしへの形而上の正しい語のすがた」を追究しようとするところにあることが見えてきた。これは季鷹の校正活動の一つの特徴と言えるであろう。

注

- (1) 後嵯峨院時代（後嵯峨即位の仁治三年（一二四二）から崩御の文永九年（一二七二）年までを指す）に成立したと思われる。『風葉和歌集』に二首入集していることから、その成立の文永八（一二七一）年までに成立したとされる。
- (2) 拙稿「苔の衣」穂久邇文庫本系統卷一・四相当諸本に

ついて」（『年報新人文学』第一六号、二〇一九年二月）、
「苔の衣」金沢大学附属図書館蔵本及び京都市歴史資料館蔵本について」（『京都大学国文学論叢』第四三号、二〇二〇年四月）

(3) 拙稿「金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻」京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照（二）～（四）（『京都大学国文学論叢』第三九～四二号、二〇一八年四月～二〇一九年九月）

(4) 鈴木淳「天明七年の加藤千蔭」（『橘千蔭の研究』、ペリカン社、二〇〇六年）および高橋貞一「賀茂季鷹の没年齢とその蔵書」（『京都市立西京高等学校研究紀要 人文科学』第四号、一九五四年）、盛田帝子「近世雅文壇の研究」（汲古書院、二〇一三年）参照。

(5) 「桐壺」の箱は、『万葉集』『三十六人歌集』『同家集補』『陸々集 切抜』『能宣集別本新写』『貫之集 別本』であり、季鷹の関心の中心が和歌にあることが窺える。なお「東屋」に『源氏物語』五十六冊、「巳」に『源氏物語』五十冊が見える。

(6) 注(3)参照。三卷三冊。外題「こけ衣 上(中)(下)」、内題「苔ころも上(下)」（中巻には内題なし）。上巻表紙は紺色（原表紙）。中巻表紙は茶色（原表紙）、左上部に「こけ

- 衣 中」と墨書した題簽(梅花模様)。下巻改装表紙は薄色、左上部の水色題簽に「こけ衣 下」と墨書。原表紙は紺色、左上部の題簽に「こけ衣 下」と墨書。袋綴。見返本文共紙。一面一〇行書。上巻縦二六・八cm×横一九・三cm。中巻縦二七・二cm×横一九・三cm。下巻縦二七・〇cm×横一九・五cm。朱文長方印「生山書庫」。
- (7) 飯倉帝子『近世中後期歌壇史の研究—賀茂季鷹を中心に』中「第二部 賀茂季鷹年譜稿」(一九九八年三月)。
- (8) 盛田帝子『近世雅文壇の研究』第二部第九章 江戸和学者たちの源氏物語和歌」(汲古書院、二〇一三年)。
- (9) 盛田帝子『近世雅文壇の研究』第三部第十六章 賀茂季鷹の能宣歌誤写説」(汲古書院、二〇一三年)。
- (10) 『土佐日記抄』は安永五年の夏に一校を終え、『讃岐典侍日記』には安永七年夏、『弁内侍日記』には安永八巳亥春二月九日の識語がある。『更級日記』には天明元年十二月廿一日、『中務内侍日記』には天明八年八月二日の識語がある。
- (11) 季鷹旧蔵本『とりかへばや』巻末識語に「此取かへばや物語は江戸に侍しをり山岡明阿の本をかりて人してうつさせ侍りし也」とある。さらにその後「文政九年七月十六日になん」、また頭注にて「今思ふに五十年はかりむかしの事になん」とあり、「五十年」が正しければ書写は安永五年頃のこととなる。
- (12) そのほか『雑篇記稿拔書』『諸卿御点取和歌』『堀河院百首歌之内聞書』など。
- (13) 季鷹旧蔵本『将門記』識語には、「此一冊 在江戸中令買得所謂内藤侯ノ贖庫本也可为永家跡者也／甲斐権守賀茂季鷹」とあるが、贖庫印はない。また季鷹旧蔵本『唐物語』識語には、「一とせ贖庫といふ蔵書印おし候和漢乃書多く世に出て此唐物語もそかうち也内藤本ともいふめり江戸に侍りしをりにて西行上人の親筆をはからすえて橋千蔭と、もに通りよみあはせて西上人のことなるを千蔭朱すみもてつたへにしるしつけ侍る也 寛政五年秋七月 賀茂季鷹(朱筆)」とある。同様に、季鷹旧蔵本『万松院殿穴太記』識語(朱筆)にも「此一巻は内藤侯御蔵書なりしか天明の末世にもり出たるを江戸に侍りしをりにてかひ得たりしを此比秋夜のねさめに一わたり見てあやまりとおほしき所にはつとめていさ、か正し置侍りぬ 享和元年八月二日 賀茂季鷹」とある。
- (14) 注(7)に同じ。
- (15) 黒川文庫五冊本『苔の衣』には、小山田与清のことはとして、「萩原宗固随筆云苔衣といふ」物語の本あり(中略)

為家卿の比のものとみゆ風葉集のうたをおほくいれられたり云々や清曰風葉集の哥を此物語にいれたるにはあらずこの物語のうたを風葉にとれる也風葉は文永中の作にて夫よりも以前の物かたりなり」とある。萩原宗固は天明四年没の歌人であり、小山田与清は、季鷹が親交深かった村田春海の弟子である。季鷹がどの程度これらの言説に接していたかは不明であるが、『風葉和歌集』は蔵書目録にあり、『苔の衣』の成立時期についてもある程度見当をつけていた可能性もある。

(16) 三例目は下巻一〇二オ「はつかし花とおほしもイを給へりし御かほつきも」の部分、まず傍線部を「そひ」と解した季鷹案、その後「はづかしう」と解した「イ」本校合、さらに「うそ」を見せ消ちにして「はづかしとおほしてゐ給へりし」と解した「花」本校合案という流れが見える。

(17) 盛田帝子『近世雅文壇の研究』「第二部第七章賀茂季鷹と荷田御風」（汲古書院、二〇一五年）

(18) 今野真二『仮名遺論攷』第七章『古言梯』に連なる仮名遺書」（和泉書院、二〇一六年）

(19) 注（18）に同じ。

(20) ふりがなは中巻「この二回、下巻『度脱どたつし一切者病死海さいしやべうしかい』檀特山だんとくせん」などの読みづらいと考えられるものに集中して

おり、さほど多くない。

(21) この「見奉る」が「イ」本にあったかは不明。

(22) 七九ウに「大弐のめのと御ていのかたを見るに」とあるので、ここを指すと考えられる。なお、本文の右に書き入れを消した後がある。

(23) 未見であるが、『国書総目録』によれば「春海本」が存在する。村田春海は季鷹と関係が深いので何かしら関係があるかもしれない。

(24) 田中康二「本文批判成立史」（『神戸大学文学部紀要』第一四一号、二〇一四年三月）

(25) 近世後期の国学者、歌人。備前の人。京都で賀茂季鷹に歌学を、本居大平に国学をまなぶ。主な著作に『竹取物語管見』『名字弁』など。『新撰萬葉集』は、契沖冠註を河本公輔が校し、賀茂季鷹が主閲したもので季鷹の跋がある。

(26) 水戸徳川家の第六代藩主徳川治保は寛政七年権中納言、第八代斉脩は文政八年権中納言、第九代斉昭は天保八年権中納言である。

(27) 近世中期の国学者。賀茂真淵に師事した。浚明所有の本としては、他に『古今和歌六帖』『浜松中納言物語』が著名である。

(28) 浅田徹「十八世紀地下歌学の前提——出版の時代——」（飯

倉洋一編監修『近世文学史研究二 十八世紀の文学』、ペリ
かん社、二〇一七年)

〔付記〕この論文は、二〇一九年度北海学園学術研究助成(一
般研究)の成果である。